令和7年度　第19回「白山市ミライ会議」会議概要

※会話の順番を入れ替えたりまとめたりしています。
※制度などの説明は、会議開催時点のものです。

日　時：令和7年10月9日（木）　19：00～

場　所：舘畑コミュニティセンター

参加者：10 名

◆　**運動会、盆踊り、文化祭の三大事業のほか、防災事業に取り組み始めました**

◆　**準備や運営の過程を通じて地域内の交流や世代間交流が生まれることが目標です**

（参加者）

たちはたコミュニティ協議会は、準備期間が長かったのですが、正式に組織として立ち上がってから 1 年半が経ちました。その間、旧公民館から続くいわゆる三大事業である運動会、盆踊り、そして 11 月の文化展覧会を、これまでどおり盛大に開催しています。さらに、防災にも力を入れようということで、4 本目の柱として防災事業にも取り組んでいるところです。

そして、事業を実施すること自体だけでなく、準備や運営の過程を通じて地域の交流や世代間交流が生まれることを目標にしています。

私の感想としては、舘畑の皆さんは本当に協力的で、いわゆる手弁当でさまざまな事業にご協力いただいています。舘畑は人情味のある、温かい地域だと感じています。

一方で課題としては、若い人や女性の参加がまだ少ない点です。今日のメンバーも、昔から支えてくださっている方々が中心ですが、皆さんの年齢も少しずつ上がっていきます。さらに、昔から住んでいる方々と、団地などに新しく来られた方々の間には、生活のリズムや地域行事への距離感に違いもあります。昔からの地区では、神社やお寺の行事、米づくりなどに関わる営みを背景に、地域の行事が成り立ってきました。一方で、新しい団地の方は土日も仕事や家庭の予定で忙しい場合があり、若い人や女性が参加しにくいという現実があります。

これからは後に続く人、特に若い世代にも参加してもらえるようにしたいと思っていますし、そこが今後の大きな課題だと考えています。

（市長）

どのコミュニティでも必ず出てくる課題ですが、若い人の参加をどう促すか、また新しく来られた方々に地域のさまざまな事業を理解してもらいながら、参加につなげるにはどうしたらよいかが大切だと思います。どのような工夫をされているかこの後お聞きできればと思います。

◆ **親子で一緒に参加できる機会を作り事業への参加を促しています**

◆ **学校の統廃合や団地の形成など、成り立ちや環境の変化もある中で、これからどうつながりをつくり直していくかが課題です**

（参加者）

私は鶴来地区で生まれ、20 歳のときに、舘畑地区の団地に入居しました。最初は団地の住民へ行事への声掛けがあったようですが、うまくなじまなかったのか、参加する人はほとんどおらず、1、2 年たつうちにその動きも下火になっていきました。

外から来ると、どうしても「自分は部外者として見られているのではないか」と感じてしまい、地区の行事にうまく入れないことがあります。ただ、町会長協議会に入り、旧公民館の行事にも関わるようになってから、少しずつ地区になじんできました。若い人も、そうやって参加するきっかけや出る機会をつくれればいいと思っています。

しかし実際には、センターの行事について若い人に声を掛けても、なかなか出てきません。どうすれば参加してもらえるのか、苦労しているのが現状です。町会長が顔を出すたびに声掛けはしていますが、町会長は 1 年で交代します。

本当は、町会長になった人が長く関われるような環境があるとよいと思いますが、町会長の負担は大きいです。市からの広報の配布や集金など、細かい仕事が年々増えて大変になっています。その結果、結局は高齢の方が 2 回目、3 回目の町会長を担うことになります。だからこそ、若い人が参加しやすい行事を考えていかなければならないと思っています。

（参加者）

地区全体の人口は約 4700 人で、そのうち古くからの在所の人は 700 から 800 人ほどしかいません。一緒に地域をつくっていくために、組織を立ち上げたとき、運営委員会という実際に動いてもらう組織をつくり、20 人ほどで運営しています。その中に女性も 4、5 人入ってもらっています。

ただ、これまでの経緯もあって、急に変わっても「自分が何をすればよいのか分からない」という状況があります。先週も運営委員会を開きましたが、事業の取り組みを話しながら、「今こういうこ

とをしています」「自分たちが主催者として事業を進めています」という点を共有し、当事者意識を持ってほしいという話をしました。少し時間がかかると思っています。

それぞれの個性や取り組み方もあるので、すぐにどうこうなるとは限りません。ただ、突然広がることもあります。子どもたちを中心に、太鼓もそうですが、小学校や中学校の授業へ出前教室として年に何回か行っています。子どもから、30 代、40 代くらいの親世代へ、時間をかけながら広がっていけばよいと思っています。

（市長）

舘畑では、盆踊りなどを見ていると、子どもたちを含め、若い人が参加している印象があります。舘畑として工夫があるのだと思います。子どもが楽しく参加できる形で、お祭りをしっかり運営されています。中学生も運動会で仕事をしてくださっていますよね。鶴来地域全体の伝統として、中学生はこの日は部活はなしで地区の運動会に参加しなさい、という形でやってきていると思います。文化祭もこれからあると思います。

舘畑地区はいろいろ工夫してきていて、成果も出されていると思いますが、それでもやはりさらに若い人に出てほしいという思いがあるのだと思います。

ここに置いてあるウォーキングマップも工夫されていますね。これは親子で参加されていますよね。親子で地域に出て歩いてみれば地域のことが分かります。

（参加者）

昔は舘畑、蔵山、林は地区ごとに小学校があり、統合して明光小学校ができました。その後明光小学校が大きくなって広陽小学校に分かれました。舘畑は、明光小学校と広陽小学校に分かれてしまい、このコミュニティセンターから南側は明光小学校へ、松任側は広陽小学校へ通っています。学校のつながりが複雑になり、人口が増えたことによるアンバランスの弊害も、少なからず出てきたと思います。

そうした中でも、舘畑には昔から壮年会や青年団があり、その流れで、今 70 歳前後の世代の人たちが、コンパクトだった頃の舘畑をうまく継続して支えてきたことで、地区のベースができたように感じています。ただ、それも少しずつ崩れてきています。これはおそらく舘畑だけではないと思います。

鶴来地区には金劔宮のお祭りがあり、地域が一つにまとまりやすい面があります。そういう核があると、年配の人から若い人までが一緒に一つのことに取り組めるというメリットがあります。

舘畑には、そうした大きな核となる行事がありません。例えば盆踊りも、以前は舘畑・林・蔵山で集まって行っていましたが、それがなくなり、継続しているのは舘畑だけです。会場をクレインの方へ移したことで、多くの人が来るようになり、お祭りらしく賑やかな形で実施できています。地域で賑わいをつくることは、いろいろな人が地域に目を向けてくれる大きなポイントだと思います。

最近は柴木や林地区でも団地が増えてきました。そうした方々は、地区の区分も分かりにくく、場合によっては自分の町内会ですら把握しづらい状況だと思います。だからこそ、「地区があって、地区でこういうことをやっている」ということを PR しながら、高齢の方から若い人まで「ここが舘畑

なんだ」と分かるような取り組みができればよいと思います。

世代間の断絶が出てきている背景には、そうした地域の成り立ちや環境の変化もあります。それをこれからどう集約していくか、つながりをつくり直していくかが課題だと思っています。

（市長）

学校は、昔からその周りに地区が形成されてきたもので、とても重要だと思います。統合したと思ったら、また分かれていったという歴史もあります。そういう中でも、今の形を前提にしながら、舘畑地区ではお祭りを中心にいろいろ取り組んでいただいているのだと思います。

鶴来のほうらい祭りをはじめ、お祭りが中心にある地域は、確かにある意味まとまりやすいと思います。現在、金城大学総合経済学部の学生たちが「地域の祭り」をテーマに、地域活性化のために何ができるかを勉強しています。市内では、いろいろな大学の学生たちが、いろいろな場所でさまざまな取り組みをしています。白山市全域が、大学のフィールドワークの場になっているとも言えます。そういう大学生などの若い人たちが、地域の中に入っていけるといいなと思っています。

◆ 子ども中心の事業をして親が地区のことに協力していく流れ、人が人を呼ぶ形を時間をかけてつくりたいです

（参加者）

若い人の担い手不足の話がありましたが、私の町内会には昔から住んでいる世帯が 120 軒ほどあります。行事は、田植え、稲刈り、虫送り、秋祭り、子ども太鼓もあります。子ども太鼓などは、新しく来た方も、親も子どもも参加してくれます。

ただ、町内会がうまく回っているかというと、必ずしもそうではありません。けれども、親が来てくれる場面はチャンスだと思っています。そこでコミュニケーションを取って、少しでもうまくつながれないかと考えています。

そのような中でも、子ども中心の事業を行い、親が来て、その流れで親にも地区のことに協力してもらえるようになればいいと思っています。新しい人と昔から住んでいる人が一緒にいると、どうしても軋轢が生まれることもあります。だからこそ、「この地域にはこんないいことがある」「こんな歴史がある」と伝えていくことが大事だと思います。時間はかかりますが、地道にやるしかないのかなと思っています。

（参加者）

夏の盆踊りは年間で一番人手が必要な事業です。今年も町会長の皆さんにも応援に来てもらいました。若い人たちも、地区の中に少しずつ入ってきていて、一緒にやってくれています。これをもう少し広げる形にしていけばいいと思っています。

人が人を呼ぶ形をつくっていけるのではないかという道が、少しずつ見えてきているように感じ

ています。盆踊りは最大のイベントですし、数えると 60 回、70 回と続いてきた行事ですので、これからも残していけるように働きかけを続けていきたいと思います。

（参加者）

小さいころからここに住んでいるので、子どものころに参加した運動会や盆踊りが、いい思い出として残っています。そうした経験を新しい子どもたちにも味わってもらい、地域のことを好きになってもらいたいと思っています。

キャラクターやじょんがら、「めぐり唄」などをきっかけに子どもたちの関心を引き、楽しい思い出を残してもらえれば、10 年後、20 年後には地域を担う人材に育っていくのではないかと思います。

また、子どもをきっかけにして大人にも行事に集まってもらい、その機会を大事にしながら、この地域を継続していけるようにしなければならないと思います。行事は年間に何度も増やせるわけではなく、三大行事が中心になります。機会は少ないですが、増やしすぎると行事ばかりやっているという声も出てくると思います。

◆ マスコットキャラクターの「めぐりんとあみちゃん」が生まれ、地域づくりに役立てています

（参加者）

「めぐりんとあみちゃん」のキャラクターは、令和元年に舘畑じょんがらを新しい形で残そうとしたところから始まりました。その後、「歌詞がしっくりこない」「舘畑の歌詞になっていない」という声が出てきたので、歌詞を作り直そうということになり、舘畑のことを入れた歌詞を作りました。歌の名前は「めぐり唄」にしました。

歌ができた後、曲調も変えようという話になりました。舘畑出身の作曲家に、「こういう曲調にしたいのでお願いしたいです。お金はないですが、頼みます」と電話をしたところ、快く引き受けてくださって、「めぐり唄」が完成しました。

この歌ができたことをきっかけに、「めぐりんとあみちゃん」というキャラクターが生まれました。歌を聴いた女の子がイメージして描いてくれた絵が、このキャラクターの原案です。

このキャラクターができたことで、いろいろな事業の中で活用できるようになりました。小学校に行くと、子どもたちはキャラクターの名前も覚えてくれています。親世代はまだほとんど知らないのが現状ですが、そこから広げていくしかないと思っています。これから 10 年たてば、子どもたちが大きくなり、知っている人が増えていきます。そういうところから進めていきたいと思っています。

（市長）

子どもたちに対して、小中学校に出前教室を行っているということでしたが、そういう場面では、

こうした取り組みも一緒に伝わっていくと思います。そうして子どもたちは、自分の地域や自分のふるさとを意識するようになりますし、そこはとても重要だと思います。

先ほどのように、神社があって祭りがあると、それが中心になりやすい面もあります。ただ、今それがないのであれば、ないなりに、こうしたものを新しく作っていくこともできます。舘畑の協議会は、まさにそういう取り組みをされているのだと感じます。そういう意味で、地域づくりがしっかりできていると思います。子どもたちが育っていく地域にしていくことが大切だと思います。

◆ 子どもが増えていることによる通学路の混雑や交通安全が心配です

（参加者）

最近柴木町では宅地造成が進み、子どもの人数が増えてきています。今後、6 年後くらいにはさらに増えていくと思います。先日も皆さんに集まっていただき、新しく来られた方にも出席してもらい、センター長と一緒にいろいろなお話をしました。どこまで伝わったかは分かりませんが、皆さん積極的に参加してくださいました。

その中で、配布物を PDF 化できないか、配る作業が大変だという意見が出ました。参加された方は、子どもが 1 歳、2 歳という家庭が多く、今すぐどうこうという話ではありませんが、神社の話題なども含めて共有しました。今後どうなっていくか分かりませんが、少しでも新しい人たちと会話を重ねていこうと思っています。

通学路についても、富光寺、部入道、柴木で子どもが増えて混雑していくと思います。冬は除雪がきちんと入るのか心配もありますが、お互いに「協働」ということで、皆さんを少しでも地域に取り込んでいきたいと思います。

（参加者）

通学路について、広陽小学校にも伝えながらいろいろ要望を出しています。最近は、見守り隊の方が高齢化で引退されているという話を各地区で聞きます。そういった状況もあるので、横断歩道を緑にして目立つようにできないか、という要望を出しています。

（市長）

PTA の安全プログラムという取り組みがあって、学校や関係機関と一緒に現地を回っているところもあります。子どもの登下校の安全は大事ですし、事故も心配ですからね。

◆ **炊き出し訓練を実施したほか、運動会で防災に関する種目を入れる計画を立てました**

◆ **避難所の開設について、各所連携した具体的な訓練が必要だと思います**

（参加者）

今年は運動会に防災要素を取り入れた行事も計画し、防災士連絡会の中で内容を相談していました。先に言うと面白くないので、当日発表にしようと思って町会長には話さずにいました。ただ、雨で実施できず残念でした。

今後も防災に興味を持ってもらい、本格的な防災の取り組みに参加してもらうきっかけを作りたいと思っています。

（参加者）

防災をテーマにして週末にイベントをやっても、人が集まりにくいです。だから、集まる機会に防災を組み合わせたいという話が出ていました。その流れの中で、運動会でやってみようという話になりました。

昨年は炊き出し訓練をしました。ここにはキッチンがないので、外でガスを引いて、婦人会の方にも来てもらって実施しました。実際に使ってみないと分からない、ということで取り組みました。ただ、週末は習い事がある家庭も多く、子育て世代の親御さんをどう巻き込むかは課題です。

避難所の開設に関して、今年避難所開設キットを各コミュニティセンターに配置してもらいましたが、これまでは支所に置かれたままでした。自主防災組織で、避難所を開設するときに「誰がそれを取りに行くのか」という話になり、コミュニティセンター分は現地に設置してもらいました。

ただ、キットがあってもすぐに避難所を開設できるわけではありません。分厚いマニュアルが入っていても、そんな場面でゼロから読んで誰がやるのか、というのが正直な感想です。

調べたところ、例えば野々市市の事例では、市が防災士協会に依頼し、講師が各コミュニティセンターなどを回って、ケースの中身を使いながらワークショップを行い、手順をアクションカードに落とし込んでいました。地区ごとに環境が違うので、「自分たちの地区に何が必要か」まで整理して作っていました。そうすると、誰が来てもそれを使って避難所を開設できる仕組みになります。

地域ごとに違うものを自分たちで作っていくことはとても大事ですが、差も出ます。スピードも考えると、もう少し連携して進められる形があった方がよいのではないかと思っています。

（市長）

避難所の開設については、地区支部職員と顔合わせをしています。確かにマニュアルは分厚いです。ただ、今回の能登半島地震でも、職員が自宅から市役所や担当する場所へ行けず、その場で避難所を立ち上げたそうです。

訓練をいろいろ重ねることで、「何が必要か」「何をしなければならないか」はある程度分かります。結局は、そこに集まった人たちがどう協働できるかだと思います。その「協働できる状態」を、日

頃からつくっておかないといけません。町内会の行事にあまり参加しないなど、つながりが薄いと、いざというときに状況が分からなくなります。

そういう意味では、「協働でつくるまちづくり」そのものが、防災にも通じると思います。こうして顔を合わせることも大切です。

◆ 技能実習生など海外から来て働く方々と、文化交流や防災面、ゴミ出しルールなどさまざまな面でつながりたいと思っています

（参加者）

海外から来て働いている方々についても把握して、防災訓練の案内などを届けたいのですが、方法が課題です。企業に協力してもらった方がよいという話もよく出ます。国際交流サロンにも行きましたが、利用者層が異なっているようで把握しきれていませんでした。アパートか会社の寮に住んでいると思いますが、人数など詳しくは把握できていません。どうやって情報を届けるかは、防災だけでなく、ゴミの出し方の問題などにも共通する課題です。

（市長）

会社の寮になっているところは、管理している方がいらっしゃるはずです。町会長のときには、地域の住民とうまくいかないことがあった場合には、市外でしたが、その管理者に連絡していました。外国人の方と直接話すのは、なかなか難しかったです。

（参加者）

舘畑地区には 80 名近くの外国人がいますが、なかなかコンタクトを取れないのが現状です。

今年は初めて、盆踊りのチラシに英語で「Bon Dance」と書き、盆踊りがどういうものか簡単に説明を入れました。今年が初めてなので、目に留まっても「へえ」で終わっているかもしれません。

ただ、今年度も含めて来年度からは、特に人が集まる場のチラシなどには、できるだけ英語で、簡単でも「こういうことをやっています」と載せられるように考えてほしいと伝えています。時間はかかると思いますが、誰か一人とつながれれば、そこから広がっていきます。

（参加者）

外国人もいろんな行事行きたがっています。日本の文化大好きですよ。花火大会をわざわざ電車に乗って見に行きます。

（参加者）

外国人がいる町内会では、本当は最初に町内会からコンタクトを取ってくれればいいのではないかと思います。

ここはベトナムの方が一番多いので、誰か一人でもつながれれば、例えば調理室があればベトナム料理教室をやりましょう、というような企画ができます。そうした活動をきっかけに地域の人も参加して、つながりが広がっていくと思っています。

以前、調理室の要望書も出しました。建設当時には、地区の人たちは「面倒だからいらない」と言ったのかもしれません。現在の状況では、ぜひ、何かの形であるといいと思っています。

（市長）

鶴来地域5地区の公民館には調理室がありませんが、事業を進める中で必要性が高まったのでしょうね。

旭コミュニティセンターは部屋を改装して調理室を作りました。確かに避難となると、調理施設はあるほうがいいですよね。日頃から子ども食堂などをやるときも、調理施設がある場所のほうがいろいろやりやすいです。

◆ 二次避難施設で実施する防災体験会で、子どもたちとともに学んでいきたいです

（参加者）

防災の日を決めて、防災体験会を計画しています。そこに若い人たちを引き込めないかと考えていますが、防災は敷居が高く感じられて、なかなか参加してもらえないのが現状です。今回、二次避難施設を実際に使うことを考えていてとても良い案だと思っています。

例えば、学校を使う場面では、子どもたちが「自分の学校にはここにこういうものがある」と、避難してきた保護者と一緒に案内できるといいと思います。そうすることで、子どもにも防災意識が育つのではないかと考えています。

輪島市では子どもの頃から防災教育に力を入れてきたと聞きました。避難所になったときに、子どもたちがマークを作ったり案内板を作ったりして活躍したそうです。小さいときから大切だと教えておけば、いつか必ず役に立つ場面があります。

もし今後災害が起こり、二次避難施設として小学校を使うことになったときに、「そういえば、こういうことをやったよね」「ここを使ってやったよね」と少しでも覚えていれば、次の機会に生かせるのではないかと思っています。

（市長）

輪島や能登でも、避難所で子どもたちがかなり活躍していました。輪島も落ち着いてきてはいますが、まだ復興の途中です。

皆さんの話を聞いていると「子どもたちを中心に」という話題がよく出てきます。舘畑では「子どもたちをこの地区で育てる」という意識が強いのだと感じます。これは最近始まったことではなく、長い歴史の中で舘畑として受け継がれてきたものなのだと思います。

ほかの地区にそれがないということではありませんが、今日お話を聞いて特に強く感じたのは、子どもを中心に事業を行い、あくまで事業として目標も掲げながら、盆踊りのように多くの人の協働が必要なことを、実際に形にしている点が大事だということです。

ただ、今できているからといって、未来永劫ずっとできるとは限りません。組織として継続していくことが必要です。そういう意味で、市民協働によるまちづくりとして地域コミュニティの組織づくりを進めてきましたが、うまく回っている地域もあれば、まだ悩みを抱えている地域もあります。

これから、協議会の会長やセンター長の集まりなどで意見交換を進め、良い事例を共有していければ、各地区がさらに活性化していくのではないかと思っています。

◆ 屋内の子どもの遊び場があるといいと思っています

（参加者）

子育てに関係する話ですが、私には小さい孫がいて、よく感じることがあります。孫を連れて遊びに行こうと思っても、天気の影響もあって、近場にちょうど良い場所があまりありません。

その点、舘畑地区にはクレインがあり、近くにはグリーンパークもあります。ただ、グリーンパークはこの 10 年ほど、ほとんど手が入っていないような状態で、かなり廃れているように感じます。

クレインには児童館があり、テニスコートがあり、プールもあって、とても良い施設です。ただ、私が思い描いているのは、クレインと七原新町の田んぼや畑が広がる場所を生かして、増えている子どもたちが遊べる場所を整備できたらいいな、ということです。

せっかくあるグリーンパークとうまく連携して、例えばグリーンパークからクレインまで、大人も子どもも走れるようなランニングコースを作るなど、上手に連携できないかと思っています。

（市長）

子どもが遊べる施設については、市長への提案ハガキなどでもご意見をいただいています。トレインパーク白山の中にも少しありますが、市全体のニーズを受け止められる規模ではありません。保育所の園長先生方からも、雨の日に行ける施設がほしいという声をよく聞きます。近隣の南加賀地域では、市の体育館の一部に遊び場を作った例もあります。公園はいろいろありますが、雨が降ると使いにくいという課題もありますので、そうしたご提案も踏まえて、今後考えていかなければならないと思っています。

一方で、白山市は市域が広く、小松市と人口は同程度ですが、古い施設の数は小松市の 2 倍以上あります。維持管理に費用がかかり、すべてを直そうとすると、税負担も大きくなってしまいます。ただ、それでも、古い施設をうまく活用し、改修しながら使っていきたいと思っています。

クレインには温水プールがあり、松任にも松任総合運動公園の温水プールがあります。一方で、南のほうにはそうした施設がありません。市域内の施設配置のバランスも考える必要があると思います。

とはいえ「子どもが遊べる施設」は非常に重要だと考えています。トレインパークではドクターイエローの展示も始まりました。中には白山をイメージした、登って遊べる遊具もあります。イオンモール白山にも、少し料金はかかりますが、子どもが遊べる施設がありますね。

（参加者）

最近は、商業施設が遊び場を作っていることも多いですね。野々市市内の遊び場に、孫を連れてよく行きます。特に屋内の遊び場があるといいなと感じます。

ドクターイエローの中には入れないのでしょうか。孫がどうしても入りたいと泣いてしまって、無理やり連れて帰ってきました。

（市長）

ドクターイエローは JR 西日本の所有物で、管理も JR 西日本が行っています。計器類がある部分などは、もう使わないので問題ないと思いますが、鉄道が好きな人も、子どもたちも、見たい方は多いはずですので、相談していきます。

11 月には白山総合車両所の工場見学会があります。昨年は 3,000 人でしたが、今年は倍の 6,000 人まで増やして、JR 西日本が対応してくれます。あわせてトレインパークも隣で運営していますので、かなり多くの人が集まると思います。

（市長）

今年のミライ会議のテーマは市民協働によるまちづくりということですが、舘畑では、実際に協働を実現しようという強い動きを感じることができ、大変うれしく思いました。地域づくりを協働してしっかり進めている雰囲気がよく伝わってきますし、祭りも雰囲気がよかったです。また、何度か出てきました子どもたちをこの地区で育てるということもすばらしいと思います。

新しい団地ができて人口が増え、対応にご苦労もある中で、舘畑地区がこれまで積み重ねてきた取り組みと、新しく来られた方々がうまく融合できている面もあると感じます。そうした積み重ねが、協働による成果につながっていくのだと思います。市としても、しっかり支援していきたいと考えています。本日はさまざまなお話しをお聞かせいただき、どうもありがとうございました。